



長寿世界一の日本に警鐘 英医学誌、 喫煙・自殺増加懸念

世界的に権威ある英医学誌ランセットが9月1日、日本の保健医療に関する論文特集号を発行する。長寿世界一を達成した医療の貢献を評価した一方で、男性の喫煙率の高さや自殺の増加などから長寿国の地位を危ぶむ指摘も掲載している。

同誌は日本の教訓を世界各国の保健医療政策に活かす狙いで特集を作った。渋谷健司東京大学教授、武見敬三日本国際交流センターシニアフェローら日米欧などの専門家66人が協力した。

長寿世界一になった理由について1950年以降、病気別の死亡率の国際比較などで分析した。50～60年代前半には感染症対策、60年代後半からは減塩や降圧薬の普及による脳卒中死亡率低下が貢献した。

今の日本で死亡の危険因子は喫煙と高血圧と指摘。全成人が禁煙すれば平均寿命は男性が1.8年、女性は0.6年延び、血圧を下げれば男女とも0.9年延びると推定する。だが、現状は対策が不十分という。

日本の自殺率は10万人あたり

24.4人(2009年)で米国の11.0人(2005年)などに比べて高い。

同誌のコメント欄でクリストファー・マレー米ワシントン大教授は日本の経済停滞、政治の混乱、高齢化、たばこ規制の不十分さを指摘し「対策をとらなければ世界での平均寿命の順位が落ちていくかもしれない」と警鐘を鳴らしている。

(8月31日付朝日新聞)

うつ病診断に新指標 広島大グループ開発

広島大学の山脇成人教授(精神神経医学)らの研究グループがうつ病の診断に、脳細胞を活性化するとたんぱく質の遺伝子の働き具合を指標とする新しい方法を開発した。採血から2日後にほぼ確実に診断できるという。うつ病の診断は、医師の臨床所見による主観的判断で行われているが、客観的な診断が期待できるという。8月31日付の科学誌プロセスワン电子版で発表する。

山脇教授らによると、このたんぱく質は記憶や神経細胞の発達に必要な「脳由来神経栄養因子(BDNF)」で、うつ病患者の血液中には相対的

に少ないことに着目した。

中程度のうつ病で、30～59歳の男女計20人の血液を採取し、BDNFを作り出す遺伝子の働きを調べた。その結果、遺伝子が働き出す初期の部分を見ると、20人全員の血液で、ほとんど機能していないことを確認した。山脇教授は「症状の早期発見や投薬治療の効果を調べる指標としても役立つ」と話す。

(8月31日付読売新聞)

心の問題理由の 休職者がある事業所 5年前から倍増

厚生労働省が1日にまとめた「労働安全衛生基本調査」によると、メンタルヘルス(心の健康)の問題で連続1か月以上休んだ労働者がいる事業所は5.9%で、5年前の前回調査の2.6%から大幅に増えた。厚労省は、この間、景気低迷で人員削減が進み、職場内のストレスが高まったためと見ている。

昨年10月末時点の状況について、10人以上の従業員がいる全国8742事業所と、そこに勤める労働者1万1557人が答えた。

メンタルヘルスが理由で過去1年間に退職した労働者がいる事業所は2.8%。退職か休業した人のいずれかがいる事業所は7.3%だった。

(9月2日付朝日新聞)

豚インフルエンザ 米で新種、2児感染

米疾病対策センター(CDC)は2日、米国内の子ども2人が新種の豚インフルエンザウイルスに感染したと発表した。2人の健康状態はすでに回復しており、今のところ感染の広がりはない。ウイルスは2009

年に発生し、世界的に流行した H1N1 型インフルエンザの遺伝的特徴をもっており、同センターは感染拡大を防ぐために監視強化を呼び掛けている。

ウイルスを調べた結果、H3N2 型の豚インフルエンザであることが判明した。ただ、8 本ある遺伝子のうちの 1 本が、2009 年に世界的に大流行した H1N1 型由来の遺伝子に入れ替わっており、豚の体内などで交雑して新たなウイルスができた可能性がある。

これまでの調査結果では、ウイルスが人から人に容易に感染する能力を持つ証拠は見つかっていないが、AP 通信は、ウイルスが H1N1 由来の遺伝子をもったことで、人から人へ感染しやすくなる恐れがあることを指摘する研究者のコメントを紹介している。

(9 月 3 日付毎日新聞)

女性のギャンブル依存症 社会復帰を NPO が支援

ギャンブル依存症に悩む女性の社会復帰を支援する NPO 法人「ヌジュミ」(横浜市保土ヶ谷区)が 12 月、同区内の新しい施設に移ることになった。

厚生労働省研究班の調査(2009 年)では、男性の 9.6%、女性の 1.4% がギャンブル依存症とされており、同法人を主宰する田上啓子さんは「誰にも言えず苦しい思いをしている女性がたくさんいる。気軽に連絡をとってほしい」と呼びかけている。

「ヌジュミ」とは、沖縄の方言で「希望」を意味する。ギャンブル依存症を克服した田上さんが「女性が気兼ねなく通える施設が必要」と考え、2007 年 4 月、横浜市保土ヶ谷

区のマンションの一室に開所した。ギャンブル依存症に悩む女性がほぼ毎日集まって、それぞれの経験を語り合う。これまでに、8 人が社会復帰を果たした。

田上さんは「『ギャンブルをやっているのは自分』と気づくのが第 1 歩。ゆっくり一緒に治していきましょう」と話す。

(9 月 3 日付読売新聞)

「睡眠時無呼吸センター」 開設 九大病院

九州大学病院(福岡市東区)は、睡眠中に断続的に呼吸が止まる「睡眠時無呼吸症候群」の検査や治療を専門に行う「睡眠時無呼吸センター」を開設した。

睡眠時無呼吸症候群は、睡眠中に舌がのどの奥に沈むなどして気道を塞ぎ、呼吸が断続的に止まるもの。症状としては、大きないびきや日中の異常な眠気、集中力の低下などがある。重症例を放置すると、高血圧や糖尿病、心不全といった内科的疾患の発症や悪化を招くとされる。

専門に扱う診療科がはっきりしない場合が多く、不眠による精神的な苦しみを訴えて精神科に通う人がいる一方、呼吸器科や耳鼻科を訪れる人もいる。

センターは循環器内科が中心となり、精神・神経、呼吸器、歯、耳鼻など 8 科で構成。外来診療を週 3 回行い、機器を貸し出している簡易検査や、1 泊入院での精密検査を行う。治療が必要な患者には、睡眠時の下あごの落ち込みなどを防ぐマウスピースを作ったり、寝ている時に人工的に空気を送って気道を確保する機器を処方したりする。

センターでは 6 月に入院検査を始めて以降、受診者が増え、1 日に

10 数人が訪れる。1 週間に 5 人ほどが検査入院をしている。安藤真一センター長(睡眠呼吸障害)は「睡眠時の呼吸障害の治療は生活習慣病の予防の一貫にもなる。地域の病院とも連携し、よりよい治療を行う体制を整えたい」と話している。

(9 月 5 日付読売新聞)

100 歳以上の女性 初めて 4 万人上回る

「敬老の日」を前に、厚生労働省は 13 日、100 歳以上の高齢者が前年に比べて 3307 人多い 4 万 7756 人(9 月 15 日時点)となり、過去最多を 41 年連続で更新すると発表した。

女性は 4 万 1594 人(前年比 3014 人増)、男性は 6162 人(同 293 人増)で、女性は初めて 4 万人を上回り、女性が占める割合も 87.1% と調査開始以来、最大となる。

人口 10 万人当たりで 100 歳以上の高齢者が占める割合は、全国平均 37.29 人で前年比 2.43 人増。都道府県別では 2 年連続で島根県の 75.7 人が最多で、一昨年まで 37 年連続トップだった沖縄県(66.04 人)は昨年の 2 位からさらに順位を下げて 3 位となった。

2 位は昨年 3 位の高知県(67.58 人)。今年度中に 100 歳となる高齢者は 2 万 4952 人(前年度比 1683 人増)。

(9 月 13 日付読売新聞)